



## 「枠の外からの承認」- 経験者の語る不登校 -

## 所員 岡田 行雄

中学生時代に不登校だった保育士さんから話を聞く機会を持つことができた。

以下はその時の記録である。

「私が不登校になった原因」は今でも分かりません。小さな要因と思われるものは沢山挙げられますが、それが原因で不登校になったとは言い切れないと思っています。私自身の心の持ち方や中学生の時に経験した友人関係などがほぐせない糸のように絡み合ってきて、学校に行けない状況が気づかないうちにできてきた、と今では考えています。不登校中、私は将来への焦りや不安、人と関われない自分をどうすることもできず、毎日毎日、父や母に八つ当たりを繰り返していました。このような毎日の中で父は「どうにでもしろ」という態度でしたが、母は自分の不安を顔にも出さず、「大丈夫だよ」「何とかなるよ」というサインを、たぶん自分にもそう言い聞かせるようにしながら私に送ってくれていました。私を信じながら送り続けてくれた母のサインが本当かどうか確かめつつも、それが唯一の救いだったことを思い出します。

不登校を経験した私が自分自身を振り返ってみると、不登校の経験者は、自分以外の世界とつながることに大きな不安や怯えを持っていると思います。この不安を乗り越え、多くの人たちと関係を持つことができるようになるためには、自分自身を守り理解してくれる環境の存在が不可欠だと思います。環境とは、自分を理解してくれる人、自分を守ってくれる組織の存在かもしれません。先ほど、私自身の心の持ち方、ということをお話しましたが、私は予定されていない突然の出来事が苦手でした。見通しがあると安心して過ごせるのですが、見通しがないと大きな不安感に襲われます。だから、不安を解消するためにいろいろな場面でいつも先回りをしてきました。例えば新しいクラスになると、どうすれば友人ができて、上手く人間関係が築けるだろうかと、友人ができる前から気を使い、学級開きが始まって同級生と関わる頃にはもう疲れ切っている自分がいます。私は、友人関係を持つことができない性格なのか、という不安が心の底にたまってくるような時期でした。このような疲れを抱えていてはしだいに登校できなくなってきました。いったん、不登校と言われている状況になると、欠席が続いているという負い目から他人の視線に敏感になり、学校に行かなければという強迫観念みたいな意識が引きこもりを加速させていったように思います。

高校時代は、長期欠席はないものの欠席と出席を繰り返しましたが、何とか学校を卒業し、保育士資格の取れる専門学校にも行くことができました。そのおかげでこうして保育士として子どもたちと楽しい生活を送らせていただいています。この間、本当に様々な人たちの支えがあってここまで来ることができました。このような生活ができている現在でも、枠の中に閉じこもっていると、安心感をもつ一方で、

孤独感から逃れたいと感じている自分が存在します。その反面、保育士として生活できている自分が再び壊れて社会から疎外され、枠の中に押し戻されるのではないかという不安感を持ち続けていることも事実です。枠の中にも枠の外の生活にもそれぞれの不安があるということです。

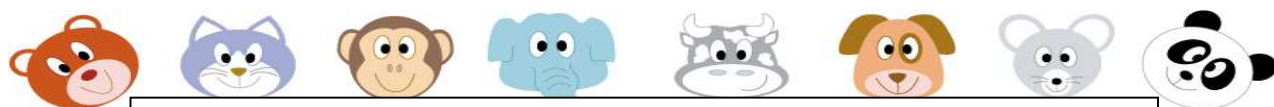
保育士になりたての頃、話し手が、自分の努力してきたことを持ち時間の中で話し、聞き手は、話し手を受け入れたり承認したりするような感想を簡潔に述べる研修会に参加したことがありました。聞き手からは、私の努力を沢山ほめてもらえたのでとても嬉しかったのですが、それ以上に、自分の努力を沢山話すことができたのがとても良かった気がします。歳を重ねるごとに話をじっくり聞いてもらう機会が少なくなってきましたが、話を聞いてもらい、さらに私の努力を認めてもらえることがとても良かったと思いました。それ以来、私は園児やお母さんたちと接する時には、沢山の話を聞くようにしています。いつ頃からか、私は話を聞くことにも喜びを感じるようになってきました。

職場でも、園児が帰宅した後の下駄箱の汚れに気が付くたびに私が掃除をしていたら、ある日園長先生から、「下駄箱の掃除をしてくれてありがとう」と突然声をかけられました。下駄箱の掃除をほめられたことよりも、私を見ていてくれたことの方がうれしかったことを思い出します。

枠の中に閉じこもりがちだった自分が、こうして枠の外にも安心できる場所があることを知ることができたのは、今まで私と関わってくださった方のおかげです。園児や保護者の方、園長先生はじめ同僚の先生方のおかげで、少しずつ安心して過ごせるようになってきました。枠の存在を強く感じ再び引きこもりたくなるときも時にはあるのですが、それもまた人生、と思って過ごせるようになりました。

ここに登場した保育士さんは30歳代半ばの方だから平成の初めころに小学校に入学し平成10年前後に中学校を卒業されたはずである。筆者には不登校経験者から直接不登校の原因等を聞いた経験がなかったので、驚きを覚えながら話を伺ってきた。話しにくい内容も沢山あったことと思うが、突然の筆者の申し出にここまでお話しくださったことに感謝している。筆者にとっては「不登校」を考える際に、この話が大きな拠り所になった。

保育士さんが「沢山の話をすることができて良かった。」、さらには「園長さんが見ていてくれた。」と言う経験が、この保育士さんが枠の外で生きる力を持つことに繋がったように思った。すなわち枠の外でも安心して生きられるようになるためには、枠の外側の人たちから「承認される」機会が重要なのではないかと考えた。



岡田 行雄（おかだ ゆきお） 元帝京大学大学院教職研究科 教授

東京都の公立中学校教員を経て、世田谷区教育委員会指導主事、東京都教育庁指導部指導主事、足立区教育委員会教育指導課長、公立中学校長としての職務を通して、理科教育研究、学校経営に携わるほか、東京都や全国の校長会役員として文科省等の事業に関わるなど、多様な経験をさせていただくことができました。中学校長を退職した直後に、私の持っていた課題意識が共通の知り合い（現理事長）と出会ったことがきっかけで NPO 法人「BOON」を設立し、子どもの貧困や教育格差の問題に取り組み、子どもの自己有用感や社会貢献力を育成する活動を始めました。開設当時から、帝京大学の学生さんをはじめ幾つかの大学の学生さんが積極的に参加してくれています。

